

変幻自在の小澤征爾さん、唯一無二の流儀とは 片山杜秀さん語る/上

須藤唯哉

毎日新聞 2024/2/19 10:30 (最終更新 2/21 14:31)



練習の合間に記者の質問に答える指揮者の小澤征爾さん = 京都市左京区の京都コンサートホールで 2009 年 4 月 5 日、望月亮一撮影

世界的指揮者の小澤征爾さんが 2 月 6 日に 88 歳で亡くなった。「世界のオザワ」と呼ばれ、変幻自在の表現は聴衆を魅了し続けた。近現代の日本人音楽家に詳しい音楽評論家で、慶応大教授の片山杜秀さんに聞くと、その豊かな音楽性を生み出した土台には、**スタイルの異なる師匠らに育まれた、唯一無二と言える流儀**があった――。片山さんへのインタビューを上下 2 回にわたって伝える。
【聞き手・須藤唯哉】

20 世紀後半を代表する世界的指揮者



インタビューに答える慶応大の片山杜秀教授 = 東京都千代田区

当たり前のことですが、小澤さんは日本だけでなく、世界全体で見ても、**20世紀後半を代表する大指揮者**です。それから、もう一つ注目すべきなのは、**日本が生み出した特別な人物**だということです。

ただ、名指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤン（1908～89年）や、レナード・バーンスタイン（1918～90年）などに比べると、小澤さんの芸風は「こういう演奏をする指揮者だ」とはっきり言いにくい気がします。例えば、カラヤンならゴージャスにベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を鳴らして「カラヤン・サウンド」を作りました。バーンスタインは「何を振っても情熱的。作曲家としてはジャズなどの米国の要素も取り入れていてノリがいい」などと、彼らの音楽を言葉で語れます。

はっきり棒を振る斎藤秀雄が師匠



激しく指揮をする指揮者の小澤征爾さん京都市左京区の京都コンサートホールで 2009年

近代の指揮者の系譜学みたいな話になりますが、小澤さんの師匠である**斎藤秀雄**（1902～74年）は、戦前のNHK交響楽団で活躍した**ヨーゼフ・ローゼンシュトック**（1895～1985年）というスタイルのはっきりした指揮者に影響を受けました。彼の芸風をまねようとして、自分の指揮のスタイルや教育のメソッドを作りました。

ローゼンシュトックはアルトゥーロ・**トスカニーニ**（1867～1957年）に影響された人です。トスカニーニは情緒たっぷりに振るタイプではありません。イタリア・オペラの中でもベルディが得意で、歌と伴奏が合うようにリズムをしっかり決めて、それに歌手を乗せていくスタイルです。「ビシバシやれ」というトスカニーニのスタイルを、ローゼンシュトックはまねしました。

そんなノリを「20世紀の音楽表現だ」と確信したのが、斎藤です。ビシバシと**時間的な狂いがないよう、はっきりと指揮棒を振ることが大事**だと考え、弟子たちには**一拍一拍が分かるように徹底的にトレーニング**した。そんな英才教育を受けたのが小澤さんです。

カラヤンやバースタインの弟子に

小澤さんは、ビシバシと音楽を作る斎藤流で終わるのではなく、**その後にカラヤンの弟子**になります。**カラヤン**はトスカニーニに憧れていたため、ウィルヘルム・フルトベングラー（1886～1954年）のような、はっきりしない指揮は駄目だと考えていました。

その一方で、ビシバシと棒を振るだけでは物足りないとも思っていたんですね。だから、**カラヤンはベルリン・フィルで音をたっぷりと濃厚に鳴らしました**。つまり、「カラヤン・サウンド」というのは、即物的にはっきりと振るトスカニーニ流を基本としながら、一つ一つの音を豊かに鳴らす意識を付け加えたので、ゴージャスな音色になりました。

そこまでは、まだつながりますが、次に小澤さんは「バーンスタインが好きだ」と言い出し、弟子入りします。バーンスタインは、それまでのトスカニーニやカラヤンとは全然違うスタイルです。師匠のセルゲイ・クーセビツキー（1874～1951年）のように、クリアに棒を振らずにロマンチックにしたがるような傾向の人の影響を強く受け、情緒や雰囲気、それから歌心で音楽に感情表現を持たせるスタイルです。だから、小澤さんからしてみれば、バーンスタインはそれまでの師匠とは水と油のように異なる芸風の指揮者です。

「爆音系」のミュンシュの薫陶も

さらに、小澤さんはボストン交響楽団の指揮者だったシャルル・ミュンシュ（1891～1968年）の薫陶を受けます。ミュンシュの気質はラテン的です。弱い音はとことん弱く、強い音はとことん強くしたりして、叫んだりします。「爆音系」、あるいは火の玉のように燃え上がるような演奏をするので「火の玉系」とも言われますね。

つまり、きっちりかつちりの斎藤秀雄、ポーカークフェースだけどゴージャスに音を鳴らすカラヤン、ロマンチックに自分の喜怒哀楽を全身で表すバーンスタイン、爆音系のミュンシュ。そんなタイプの異なる指揮者を全員、自分の先生だと言って、成立するのが小澤さんです。

きちんと時間を数えて、音楽全体がいつも崩れないように骨格をしっかりと立てることが一番の土台にはなっていますが、その上に本来なら足せていけないようなカラヤン、それからもっと足せていけないバーンスタイン、全然別次元のミュンシュが小澤さんの音楽の中では混じっているように思います。



サイトウ・キネン・オーケストラと練習をする小澤征爾さん（右）＝長野県松本市の長野県松本文化会館で 2002 年、武田博仁撮影

一人一人を尊重して最大化

小澤さんは、巨大な工場や軍隊を統率するような発想でオーケストラの指揮を考えていません。「**オーケストラは室内楽の延長である**」との考えが根底にはあります。つまり、一人一人の顔が見えることが大事で、規模が小さいオーケストラほど演奏者とコミュニケーションが取れていていいと。それで成立するアンサンブルの延長線上で、オーケストラを率いる。

だから、みんなでやりたい音楽と、小澤さん自身が「こうしたらいいのではないか」というアイデアを組み合わせ、現場でコミュニケーションを取りながら、一つの音楽を作っていく。室内楽で一人一人を尊重していく流儀と、それを調整しながら最大化していく方法が、小澤さんの基本姿勢だと思います。

指揮者や教育者として有名になった**斎藤秀雄**は、元々はチェロ奏者です。弦楽四重奏などの小さなアンサンブルを演奏することが、音楽の基本と考えている人です。小さな合奏を組み立てた上で膨らませていこうという発想でいつも音楽を考えている。

だから、カラヤンやバーンスタインのように自分のやりたい音楽を目指すのではなく、**みんなで現場で作っていくというのが小澤さんのスタイル**だと思います。指揮者らしいリーダーシップを発揮するのではなく、**その瞬間に生じるテンションによって、小澤さん自身が自由に変わっていく。そして、オーケストラのメンバーも気持ちに乗ってきて、自らの技術や感性を最大化していく。**



ジュネーブでの復活公演で会場の拍手に応える小澤征爾さん（左から2人目）。右端はピ
オラ奏者の今井信子さん＝ジュネーブで2011年7月3日、伊藤智永撮影

水と油を共存させられる小澤流

それが小澤流だとすると、自分のはっきりとしたい音楽はない。
いつも揺らぎながら、その時の瞬間最大値で、いい音楽ができるか、できないかを追求していく人です。

普通に考えれば、カラヤン流、バーンスタイン流、ミュンシュ流という水と油のような、いろんな流儀の中で、足し算やかけ算ができるのは不思議なことです。でも小澤さんの場合は、それが不思議ではないんですね。土台は斎藤秀雄だけど、いろいろな肉付けはカラヤンだったり、バーンスタインだったりする。変幻自在に、たくさんの美意識が混じって、**その瞬間ごとにいろんな響き**が出てくる。**一人にして、一人ではない**。一つの音楽が**共和国的**だったり、**多民族が共存していたりする**のが、小澤さんの音楽だと思うんですね。

小澤さんは、はっきりとした形を持たず、自由自在に表現するんです。**形がないのが、小澤征爾の音楽だ**と思わなければなりません。論理を超えて直感的でありながら、**みんなが納得する**というマジックを持った指揮者だった。理屈や観念はないんですね。常に相乗作用なんです。それを作り出せたのは、**人間としての魅力で、唯一無二の小澤流**です。

小澤征爾さんは戦後日本の“アイコン” 片山杜秀さん語る/下

須藤唯哉 毎日新聞 2024/2/21 10:30 (最終更新 2/21 10:30) 有料記事 3051 文字



グラミー賞を受賞し、笑顔で記者会見する指揮者の小澤征爾さん京都市左京区で 2016 年

2月6日に88歳で亡くなった世界的指揮者、小澤征爾さんの音楽性や流儀などについて、音楽評論家で慶応大教授の片山杜秀さんに聞くインタビュー。前編は小澤さんがタイプの異なる名指揮者たちから薫陶を受けたことに注目。後編では、「相乗効果」を生み出す小澤さんのオーケストラとの関係づくり、日本から世界へ飛躍し、小澤さんが戦後日本文化の“アイコン”（象徴）になっていった時代背景を掘り下げる。【聞き手・須藤唯哉】

やる気を引き出すカリスマ性

小澤さんは、常にプラスの方向に、オーケストラのみんなを気持ちよくさせて、「そうだ！ 行け、行け！」と乗せていきました。

特定の芸風で引っ張るのではなく、**その場でいろいろ話すことによって、みんなのやる気を引き出していく**感じです。小澤さんのキャラクターでは、割り算の作用は起きず、かけ算しか起きないような人なんです。それは**小澤さんのカリスマ性**によってなせる業です。

米国やカナダなど、ヨーロッパに比べて歴史が浅く、伝統的な流儀が固まっていないようなオーケストラで力を発揮する指揮者だったと思います。しかし、**2002年にはウィーン国立歌劇場という、ある意味で秩序のはっきりした組織のトップ**になりました。クラシック音楽家として、一つの頂点に達したわけです。

お祭りのように化学反応が起きる



サイトウ・キネン・オーケストラと練習をする小澤征爾さん（右）＝長野県松本市の長野県松本文化会館で 2002 年、武田博仁撮影

ただ、小澤さんがやりたいようにやれたのは、やっぱり小澤さんの師匠である指揮者の斎藤秀雄（1902～74 年）の教え子たちが中心となって結成された**サイトウ・キネン・オーケストラ（SKO）**や、総監督を務めた**水戸室内管弦楽団**だと思います。

小澤さんの下で音楽をやろうと、演奏会に合わせて、決まったメンバーが集まってくる。しかも、腕前がみんな名人のソリスト集団で、小澤さんの音楽性を経験で知っている。普段は別のオーケストラで演奏したり、ソリストとして活動したりする人たちが集まってアンサンブルをすると、細かいところが合わなくて粗雑になりがちですが、小澤さんの場合は、お祭りのようになってしまう。

そんなオーラを持った人が、室内楽の延長線上で「みんなで音楽をやろう」と呼びかけ、小澤さん自身は多彩なキャラクターを持っている。そして、**その瞬間ごとに、化学反応が起きていく。100 人のオーケストラでも、そんな状況を作り出せるカリスマ性を持った、唯一無二の人が小澤さんです。**

「俺はこうだ」がないオンリーワン

それは固定のメンバーで組織としての秩序ができあがっているオーケストラよりも、SKO のように 1 年に何回か集まる人たちを相手にしてこそ、自由にしなやかに変わっていける小澤流が最大限に発

揮されるということだと思います。個性の強い人たちが集まると普通は收拾がつかなくなるのに、小澤さんが指揮をすると相乗効果が生まれる。



休養明けから初めて本格復帰して「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」のオペラ「こどもと魔法」の指揮を終え、カーテンコールで出演者たちと手をつなぐ指揮者の小澤征爾さん（中央）＝長野県松本市のまつもと市民芸術館で 2013 年 8 月 23 日、山本晋撮影

他の指揮者なら「俺はこうだ」とオーケストラを引っ張っていくことで有名になりますが、小澤さんは「俺はこうだ」がないことで有名になりました。**これが小澤さんのオンリーワンたるゆえん**です。あまりにも特殊で、まねできない才能だと思います。

最後の約 20 年は病気との闘いで、ずっと調子がいいということとはなかったと思います。彼の芸風は、現場でみんなでコミュニケーションを取りながら、自らも活発に肉体で表現し、音楽を作っていきます。それは**体力**を必要とします。その意味では、体が動かなくなってからは、ご自身がつらかったと思います。音楽ファンにとっても残念なことでした。

戦後の第1世代 中国とも縁

小澤さんは**戦後の第1世代**です。敗戦の時に小学生で、戦争のことを知っていて、旧満州とも縁のある家庭でした。特別な体験をしている一家には違いなく、満州の少年時代のうっすらとした思い出を抱えていました。だから、70年代に中国の文化大革命が終わった後に、音楽監督を務めたボストン交響楽団と中国を演奏旅行で訪れました。**中国と米国の両方に、特別な縁のある指揮者**だと言えます。

ただ、特別な戦争体験に縛られている人ではないと思います。師匠の斎藤秀雄や音楽評論家の吉田秀和（1913～2012年）は戦争で大変苦労しました。斎藤や吉田と一緒に、小澤さんが学んだ桐朋学園の音楽部門を作ったピアニストの井口基成（1908～83年）は戦争協力者として、現在の東京芸大を追われています。



水戸室内管弦楽団を指揮する小澤征爾さん（右）＝東京都港区のサントリーホールで
2012年1月22日（代表撮影）

敗戦後、「文化国家」を目指す中で

戦争に負けて全てを失い、敗戦当時は日本がまさか経済大国になり、日米同盟のもと、国際的な存在感を回復できるとは思っていません。

だから、あの頃は「文化国家」と言って、文化・芸術を中心にして国の存在感を国際社会に示そうという動きがありました。日本を文化国家として再生させるために、**早期教育で音楽の才能を育てていこうとする意識を、斎藤秀雄や吉田秀和は明確に持っていました**。そんな中で、多くの人を育て、ピアニストの**中村紘子**（1944～2016年）や指揮者の**秋山和慶**さん、チェリストの**堤剛**さんら多彩な芸術家が生まれてくる。**その中でも、突出したタレントとして生まれたのが、小澤さん**なんですね。彼ほど特別に輝いた人は、クラシック音楽界の中ではいません。

経済成長とともに

小澤さんはいい意味で**日本的**だと思います。自分のキャラクターを主張せずに、斎藤先生、カラヤン先生、バーンスタイン先生はみんな先生です、と屈託がない。**文化芸術で身を立てようと、世界の全てを吸収していきながら、日本らしさを主張していこうとする**。

文化国家の中で求められる人物像の完成形が小澤征爾という指揮者だと思います。日本が朝鮮戦争の特需を経て高度経済成長に向かう60年ごろから、小澤さんは世界を舞台に本格的にキャリアを築きます。日本が経済成長でこれから豊かになるんだという時期に、小澤さんはヨーロッパで腕を磨いてから米国で活躍し、オーケストラの音楽監督になっていく。

日米が経済的に競って、80年代にもめ事が派手になる頃に、小澤さんはボストン交響楽団の音楽監督に君臨していました。米国では

日本製ばかり流通し、「日本も大したもんだ」と日本人が感じていた時です。

日本のシンボルだった



演奏後、客席にあいさつする指揮者の小澤征爾さん（中央）＝名古屋市東区の愛知県芸術劇場コンサートホールで 2006 年 7 月 20 日、兵藤公治撮影

だから、戦争で貧しい国に転落した日本が再び大国になる歩みと、小澤さんが 59 年にフランスのブザンソン国際指揮者コンクールで 1 位を受賞してから、02 年にウィーン国立歌劇場の音楽監督に上り詰めるまでの音楽人生は、足並みが大体そろっていました。

「小澤征爾は他にまねできない、唯一無二の人だ」と言いましたが、**右肩上がりに成長していく日本の姿とも合致していたんだな**と思いますね。だからこそ、クラシック音楽にあまり興味のない人々にも知られている。「**音楽に詳しくはないけど、小澤征爾って人は、とにかくすごい人で、世界で活躍している。日本も世界の中で立派な国になってよかったね**」と。

小澤さんは、そんな時代の日本のシンボルであり、一つのアイコンだったと思います。

片山杜秀（かたやま・もりひで）

1963年、仙台市生まれ。慶応大大学院後期博士課程単位取得退学。専門は政治思想史。2008年に「音盤考現学」「音盤博物誌」がサントリー学芸賞と吉田秀和賞をダブル受賞。12年に「未完のファシズム」で司馬遼太郎賞を受賞。共著に「ごまかさないクラシック音楽」、近著に「大楽必易―わたくしの伊福部昭伝―」など著書多数。